季刊

四季

第十一号

四季社

一九八七年二月二十八日発行

定価 三〇〇円

美しさへのマイウェイ

双美人

明治36年
双美人マークのクラブ化粧品が
創業いたしました。
以来、80年にわたり
皆さまに愛されてきた
クラブ化粧品が
動植物エキスを配合して
つくりあげたフルベール。
今、双美人マークは
フルベール化粧品の
シンボルマークです。

フルベール化粧品®

本社 大阪市西区西本町2-6-11
〒550 電話(06)543-0077

保存版

目　次

季刊四季・第十一号

春感（黄景仁）…… 松枝茂夫訳　2
瑞宝静苑大姉回想（遺稿）…… 高田　瑞穂　4
小春日（遺稿）…… 河村　純一　6
火山爆発 …… 坂口　允男　8
自画像 …… 福地　邦樹　10
事に感ず …… 今澤　　幸　14
霧の金剛山 …… 南川　正純　16
ぼくの花 …… 藤野　一雄　18
フィンランドの白夜 …… 大野沢緑郎　20
木の十字架の前で …… たかはし　しげおみ　24
桜の木 …… 花井タヅ子　26
音楽 …… 中嶋　康博　28
後記 …… 田中　克己　38

春感

黄景仁（松枝茂夫訳）

黄景仁（一七四九―一七八三）、字は漢鏞、一字は仲則、自ら鹿菲子と号す。江蘇省武進県（今の常州市）の人。若年にして天才詩人の名高く、同郷の洪亮吉・孫星衍・汪中と親交を結んだ。科挙にはついに志を得ず、地方の大官の幕客となって各地を転々とし、安徽督学の朱筠には特に優遇を受けたが、多病多感、極貧のなかで三十四年の生涯を終えた。

この詩は乾隆四十一年の春、北京での作、時に二十八歳。彼は前年の冬、はじめて北京に来ていた。

亦有春消息、　亦た春の消息　有りしに、
其如雨更風。　其れ　雨ふり更に風ふくを如せん。
替愁雙淚燭、　替って　愁うるは　双涙の燭、
對語獨歸鴻。　対して語るは　独帰の鴻。

宮闕自天上、　宮闕は自ら天上に、
家山只夢中。　家山は只夢中に。
東君最無賴、　東君は最も無頼、
不放小桃紅。　小桃の紅を放たず。

今年もまた春のたよりがあったというのに、このひどい雨、それにこの風は何としたことだろう。

わたしに代って悲しんでくれるのは、ただ二行の燭涙、わたしの話相手になってくれるのは、ひとり寂しく帰りゆく雁のみ。

天子様の宮闕は宮闕で天上高くそそり立っているが、わが郷里の山々はただ夢の中に見られるだけである。

春の神はまことに無情そのもの、紅い小桃の花さえ咲かせてくれようともせぬ。

〈小桃〉桃花の一種。上元節前後に糸を垂らした海棠のような花を著ける。

瑞宝静苑大姉回想

高田瑞穂

私は、明治四十三年五月十三日の誕生、妻は、大正元年九月十一日の誕生、西暦でいうと私は一九一〇年生まれ、妻は一九一二年の生まれであった。そういう私は、現在生存中であるのに、妻は、去る十一日に、一周忌をむかえた。成城住の旧友を迎える一周忌は、友達の都合を考えて、九日の日曜日に行った。

妻の旧友たちは、口をそろえて、「瑞穂さんは幸せだったね。あんないい奥さん（静苑大師）を持って」と言った。

そういう二人の結婚したのは、昭和十三年四月十五日のことであった。

西村静子は、山口県の生まれ、高田瑞穂は静岡県の生まれであった。山口県山口市は、日本の最西、静岡県浜松市は、関東地方の最西であった。二人はことばがちがうし、食べ物もちがった。朝飯に必ず附いた味噌汁も、私は赤、静子は白であった。その頃あった「赤白味噌」を使っていた静子であったが、段々赤味噌が好きになった。

静岡県と山口県との二人が、結びついたきっかけは、両方とも東京に住んだからであった。そして二人を結びつけた大きな契機をなしたのは、女流歌人北見志保子だったと思う。

この二人にとって、非常に有難い、嬉しかったことは、両者の父親同志が、非常によく話の合うことであった。

結婚して二年ほどしたある時、静子は、青い顔をして私の前に座り告げた。

「貴方は高田家の長男です。長男の嫁は子供を生まなくてはいけません。それなのに、二年もたったのに一人も生めません。長男の嫁の資格がありません。離婚して下さい。」

私は、前々からの考えをそのまゝにのべました。

「何を言うか。前々からくりかえす通り、結婚というものは一度しかしてはいけないのだよ。無数の男性と無数の女性の中の一人と一人との結婚、神様の御命令なのだからね。」

面白いことに、静子はそういうことのあった直後、「お腹が痛い」と言いだした。そして小さな子供を流産した。そしてその直後から続々と、四人の子供を生んだのであった。始め二人女児、後二人男児であった。

私が国文の女学生たちにくりかえしたことの一つは「大学院などに行くな！早く結婚して、子供を生みなさい。それで本当の大人になる。本当の大人にならなければ、文学など解らないよ！」であった。しば〳〵女の学生たちは不満そうな顔をした。しかし、それからずっと後、本当の大人になって、私の言ったことがよく解ったという便りが来ることが多かった。しかし、残念ながら、そういう状況になると、どうも本を読まない。本当に解る状況に達すると、読まないのである。

現象的な知識については、年とともに妻にはかなわなくなる。かつて浜松で、浜一中出身者の古稀の同窓会があって、小生にもどうしても出るようにと要求され、それに加えて、年の故で病気で出席出来ないものも少なくないから、そういう連中に、一首送る歌をたのむと言ってきたので、私は、前々から持っていた戯作に加えて三首ほど作り送った。するとその歌は出席者全員にくばられ、その中の一首、旧作の一首を、皆が、「そうだ！そうだ！」などと言って合唱した。

☆老いし身に何より欲しきものぞこれ人と人とを結ぶ温情

もう一つ、これは最近読んだ中で小生の好きな、毎日新聞の投書川柳の一句を紹介する。これも、決して私だけの好みではなく、同窓会、特に七十を越えた場合の同窓会だと、しば〳〵「そうだ！そうだ！」と同感を示される。

☆母親のような口きく老いた妻

静子も、正にそういう老いし妻であった。不断に私は叱られ続けたのであった。しかし、それは決して不快なものではなかった。しかし、晩年に近づくにつれて、「母親のような口」はその厳しさを増していった。そういう母親の言うことに、二女、二男全員が同盟し、小生はいつも五対一であった。しかし、そういう存在が不在となった今、小生の目前に置かれた写真と、いつも話をする小生である。

☆先立ちし妻の写真に声をかけそのうち行くと告げ続けたり

（不尽）

小春日

河村純一

天気よし京都へでも行って見ようかとあてのなきまま電車にをりぬ

停車せる窓にパチンコの看板見え貨物列車が通過しゆけり

あてのなきぶらぶら歩き京都にて小春日なれば言ふことのなし

正面に八坂の塔の見え来たる忘れゐしものが今もありしよ

木屋町の川の柳に沿ひてゆく道せまく人の稀なるたのし

めぐり見しターナーの画をはや忘るそれでよし小春の館外に出づ

睡蓮の葉のみの浮ける冬の池東山の影ここに写らず

火山爆発

坂口允男

波浮の港は夕焼け小焼けと歌われ
赤き椿の夢のせて
山の煙よいつまでもと懐しまれた
伊豆大島の三原山が大爆発を起した
黒白の煙は濛々と四千米に立ち上り
幾条もの火柱はマグマを吹き上げ
火焔は夜空に妖しくも美しい映像を
日本全国に送った。

しかし今の世相の中では
この火は核爆発の火焔を思わせ
地球の亡びの火と重なり

遂には地獄に燃えるという
業火を連想させるのだ。
炎のみ虚空に満てる阿鼻地獄は
正に二十世紀末の日本に
現前した。

人間の心の中に深く沈むマグマも
今や地表に近づいて
火山活動の前兆はいたる所に
微震を起し小噴火の焔をあげている
大爆発は近い。
この大変動が人間の文化の終末となるか
それとも新しい美の創造の大歓喜とするか
それはわれわれの双肩にかかっている。

自画像

福地邦樹

僕の潜在意識の中に

平安貴族の放蕩の男がいる

希薄な雪渓を足早やに行くチベットの僧がいる

刀を腰にさして夜中ひたひたと歩く戦国の武士がいる

五月の花を愛した北欧の少女が恥じらっている

江戸時代の酒呑みの熊さんもいる

そして警察署長だったひげの祖父がいる

あまり頑張り屋でもなかった大学教授の父がいる

神様参りが好きで料理の上手だった母がいる

電車の中で

電車の向かいの席で
二つぐらいの男の子が
金属の手すりをしきりに噛んでいる
歯が生えてくる頃で
歯ぐきがかゆいのだろうか

母さんはまことにのんびりと新聞を読んでいて
上の男の子と中の女の子も
それぞれ外の景色に気をとられて
下の子が汚ない手すりをしゃぶっているのにちっとも気がつかない

時々電車が揺れる
がくんときたとき生えかけた歯が折れはしないかと
私ははらはらしてしまう
なのに母さんがたまたま下の子を見るときは
この子はいつも運わるく
手すりをしゃぶっていないのだ

事に感ず

今澤　幸

先ごろ阿川弘之の『井上成美』を読んだ。主人公の井上は海軍兵学校出身の職業軍人で、海外駐在武官や、艦隊長官、海軍兵学校々長、海軍次官など歴任し、海軍大将という軍人としての最高位に昇った人である。米内光政、山本五十六などと海軍リベラル派の一人であったといわれる。今次大戦に勝目のないのを見通して戦争阻止に努力するが、結局大勢におし切られてしまう。そして戦争末期には戦争終結に尽すというのである。私は戦争中、職業軍人の独善性や欺瞞性にずいぶん嫌な思いをした経験があるので、後遺症か、生理的に職業軍人を好きになれない。そのせいもあってかこの本を読み終って、なんとなく未消化のしこりが残ってすっきりしないものを感じた。といって敗戦直後のにわか進歩主義者のように、無責任な批判攻撃をしようというのではない。あの当時、やたらに他人を戦犯よばわりした連中の多くは、機会主義的な心貧しい人々であったような気がする。あんな連中のまねだけはしたくないと思っているからである。それにしても海軍大将にもなろうかという人達が、負けるとわかった戦争を何故阻止することが出来なかったのだろうか、という疑問は残る。

わたしは太平洋戦争の直前に学生生活を送っていた。当時は全てを戦争に駆り立てる強大な力が加えられ

ていた。だから日独伊三国同盟（これは日米戦争の最大の原因となった）や多少でも反戦的な言辞を弄したものなら、たちまち拘引されるという状況であった。学校のキャンパスにも私服の警官がうろうろしていた。先生も学生も声をひそめていた時代である。そんな時英文学者で若手評論家であるH教授は、何時も教室で「独乙は負けます」と日独伊三国同盟の不当を評していた。またこの教授は「諸君は兵隊ごっこのまねをしに来たのではない。そんなことより本分の勉強しなさい」と平然と語り、校内で暴君のように振舞っている配属将校の耳にでも入ったらと逆に私達がひやひやしたものである。また或る社会学の教授は授業中教室から見える陸軍士官学校の校舎を指差して「彼達が国を誤るのだ」と叫んだのを記憶している。この人達も戦争反対の立場で抵抗した人達であった。だが、戦争末期になるとH教授も徴用学生を引連れて爆弾の降る軍需工場へ行き、増産報国の号令を掛けさせられたのである。あの社会学教授のその後を知る由もないが、監獄にでも入らぬ限り、何らかの形で戦争に協力させられたにちがいない。或いは一兵卒として戦場に狩り出されたかもしれない。

こう考えて見ると、ときの勢、ときの流れに抗するに人間の力の如何に弱いものかを感じる。歯車が誤って廻り始める前に、それを阻止する以外に対するの策はない。身辺の動きを冷静に、正しく判断対処することこそ第二次大戦の悲劇を体験した私達のつとめかもしれぬ。さて今日の情勢はどうだろうか。

霧の金剛山

南川正純

信じられない世の中が
いつまで続くのだろう
そんな事を考えながら……
僕は金剛山に登った。
南朝の古木が僕を見下していた。

冷たい霧が
すすき道を見えなくしている。
楠公――
あなたも、そんな思いで
歩いた道を。

ぼくの花

藤野一雄

花屋いつぱいに　ならんでゐる
昼夜の別なく　咲きつづけてゐるもの
―いつ枯れ　いつ萎れるのか

ことさらに化粧濃く　ことさらに身振りし
露を置くこともなく　風にもゆらがず
―いつ換へられ　いつ棄てられてゐるか
同じ顔がならんでゐる

アーケードの町なかの
菊　バラ　カトレア　などなど
限りなく人工にちかいものたち

僕が追ひもとめる
―貧しかつた母
　智恵おくれの妹―

そんな花を咲かせてゐる
野山は　どこにあるのだらうか

フィンランド白夜

梢のたかみにて

大野沢緑郎

薄明の湖のむこう
あかまつ　とうひ　かんば　もみ杉の森

霧のように淡いみどりのしずかなうつろい
昏れないままのコバルトブルーのあさあけ

かすかなそよぎのかなでるレガート
オスカル・メリカントのフィンランドのかぜ

想いはるかに超えた　かろやかでおもい
あの枝葉をぬいわたるルフラン

ムスタ・シュクシェとよぶ黒い秋が
霖雨のこまかい闇をつつむ日もちかい…

だがいまは透きとおる愁しさだけの刻が
梢のたかみをゆっくりうつっていっている

けはいのようにすぎる　みえないむこうに
うつっていっている

ロバニエミ

ひどくあかるい夜がすすんだ
いつまでも昼間が深入りしていて
楡の林の奥をてらした
そう　希望(のぞみ)のように　虚しい　照り返しのな
　いひかりが
忘られた日没の枝にひっかかっていた

ラップ人の青年はドイツなまりの英語をしゃ
　べった
彼の　案内ずれした真赤な服は
そのまま冬のポスターにかわった

林のなかのレストランは
トナカイの肉が奇妙にワインにあう

翳らないテラスのよこ
夏を手持ぶさたにスキーリフトが上下していた

北極圏ラインをとおく越えた草原では
ヨーロッパ中からの無数の人が踊りまくって
　いた
そこにもナチスの刎ねた橋梁の残骸がとり残
　されていた

太陽のもっとも輝かしい日
底しれない森のむこうに
果てしない湖とひろがりの野のうえに
沈まない真夜中の太陽に
昏れることない聖ヨハネの日が
いつまでもいつまでもそこにあった

木の十字架の前で

たかはし　しげおみ

［一四八三年］十一月十日の深夜に生れ
翌十一日聖マルティンの日に洗礼を受けた。
農民の孫、鉱夫の子マルティン・ルッター
五才からラテン語を学び、十八才、いまは図書館（正確には門と蔵
　書）しか残っていない小さな大学に進んだ
大学に入って初めて聖書を手にして涙し、彼の一生が定まった
（修士号を得て最初の説教をしたという教会がいまも伝わっている）
新設大学の教授に迎えられ
還俗させた尼僧と結婚し、三男二女を儲けた
彼は改革を宣言し、糾弾されたが
〈私はここに立っている
私はほかのことはなし得ない〉と結んだ
ラテン語とギリシャ語からドイツ語に直した彼の聖書はいまも読ま
れている
悪魔にも襲われたというが、亡くなるまで講義と説教を続けた

巨大な業績は大判で百巻百余冊を越え、多作と言われるゲーテやマ
　ルクスの全集をしのいで、未だ完了していないという
学生達に筆記された語録だけでも六巻に及ぶ
　その一ページに、彼は聖書についで読むべき本にイソップをあげ
　ている　イソップを自由訳した原稿が、なぜかヴァチカンに残っ
　ているとも聞いた
イソップといえば、毒杯をあおぐ前の数日間ソクラテスはイソップ
　のことを考えていたという
一五四六年二月十八日、というからには六十二歳あまりでマルティ
　ンは死を迎えた　長いこと腎臓結石に苦しんでいたらしい
マルティンの年を越えてしまったぼく
縁あってか生誕五百年記念の催しをいくらかのぞくことができたが
生誕四〇〇年記念で始められ、いまなお未完というワイマール版百
　余冊の前に立ち、その中にあるのか、まだなのか、ともあれ
彼のイソップ訳だけは読みたいと思う
腎臓結石とやらには無縁のぼくにはいつかその日があるだろう
プラトンやソクラテスはどうでもいいが、
マルティンのイソップは、ぼくの宿題だ
明日からの宿題としよう

［一九八六・一一・一〇］

桜の木

花井タヅ子

ブルドーザーの音がする
もう三日つゞいている
三本の大きな桜の木も
たおされてしまった
住んでいた人は
どこへいったのかしらない
おばあさんはもう
なくなって三年になる
あの時闇の空の高い所で
風がうなり
八十をすぎて去った命の重さ

はじめての子が産まれた頃
玄関をあけておとない
「何か買って来ましょう」
とよく声をかけて下さった
祖父の教え子で
高田でスキーをした方
庭には山の植物が
あれこれ移し植えられていた
私の長男も今はもう家をはなれ
遠くで働いている
かわる刻のすばやさ
この今のくらしを
大切にしたい

（61・11・25）

音楽

窓辺の冷たい円筒容器（タンブラー）
明るい水底のレンズに集まるのは
八分音符のプランクトンです

夏帽子

昔わたしがその下で唇を噛んだ一本の木があった
その木をゆすると夏帽子に音立てて
雨のようにおしべが落ちてきた
いまはその木は伐り倒されて
夏帽子にトマトを盛って
泣き泣き帰ってきた子供はもうみえない
ひこばえにも花なんか咲かない

中嶋康博

晩夏

お腹のふくれたかまきりが
蟬をつかんではなさない
死にもの狂いで羽をばたつかすけれど
蟬も　ああ鳴かない
子供らにさんざん弄ばれたやまかがしが
おびえた目玉を見ひらいたまま
古池の真中にうかんでいる
おみなえしをゆすっていたきりぎりすが
また静かにきしみ出す

秋夜

昼間ランプの中でまどろんでいた幸福は
夜になると煌々と輝きはじけて
すっかり自分をひとりにしてしまった
今はもう引き返す事の出来ない影を
べったりと床におとしてしまって
灯油香にむせぶ後悔を泣いている
秋の終りの小さな稲虫が
時折そのまわりをくるくると
彗星の軌道を描いて蜚(と)び廻る

偶得

鏡を覗くと俺はいつの間にか染みったれた老人になっていた
もう青年なんぞではないような気がした
右目は半分世の中を怨んでいた
口は諦めのもとに　ただ結ばれているにすぎなかった
静かに目をつむれば　相手もまたくやしそうにとじるので
俺は泣く事さえ出来なかった
悲しみは　張り裂ける程大きかったのに
打ち克つ為に俺は
それでいつもの卑屈な歌を選んだのだ
その歌今茲(ここ)に抄出せず

首　途

旅立ちの日を延期して古典を読む
今日も　そうしてまた明日も
炬燵の上の部屋咲きのさくら草
給水塔に　山鳩は寄り添っている
陽だまりの中で
汚れた包帯を巻き直し付け直し
やさしい心が決意したこと

情　事

いなかのお昼の道端で。輪生する百合の中に。
粉を一杯につけた虫がねている　二人で。

街　道

子供たちがばたばたと石段を登ってゆく
脇を急直下に谷川が駆け降だる
石橋には刻まれた昭和三年
葛がのびあがる田舎のバスの停車場で
赤錆びた看板が蚊取り線香を焚いている

海の家

潮嗅い溝を歩くもの
路地裏の石垣に隠れるもの
野菜屑をいじる少年の麦藁帽子に
風鈴のようなさびしさが縋る
下駄を引っかけた姉さんが見付けて怒鳴る

窓下楽

しおたれた花束をかきいだくひとはいないけれど
うち捨てられた花弁のない萼(うてな)を
不思議に思って手に取るひとは
あるかもしれない

明るい月夜の窓の下で
これだけの事を云い終えると
僕はこうもり傘をぶんぶんふりまわした

暗　夜

私は暗夜点々と灯る電燈を消しながら歩いている。放って置いてもいつかは突然消えてしまう希望だ。たかだか自分の姿しか照らすことのない貧しい光だ。おお　それが仕事のやり切れなさに　私は歌など作って暗闇に響かせてみる。誰も答えてはくれない　けれど誰か後からついて来やがる。

恐　山

かわたれどきにかざぐるまの廻る音はさびしい
きつねのふんのような貧しい温泉小屋から
疎らに湯煙は上ぼってゆく
浴衣掛けの幽霊が三人
並んでぼそぼそ小屋にたどりつく

――戸を締めた。

後記

高田瑞穂君が一月十日になくなつた。『四季』第一の不幸である。わたしは成城大学に就任以来、彼とは気が一番合つた。年齢が一つ上だつたが、東大の卒業は同時に昭和九年といふこともあるが、気質がよく合つた。昼食のあとの三時間目、講義を聞く者も少ないので腹立てて帰つて来ると、彼も一分おくれて帰つて来て同じ理由をいつた。早大の講師をつとめ、原稿を書き、著書も多く、原稿料や印税は奥さんに渡さず、酒や本代に使つた。彼の蔵書は近代文学に限られてゐたが。中々よいものでどこかへ寄附すれば喜ばれるだらう。

彼はまた文芸学部長といふ難職をやり、そこの教授会で学長に絶対多数で当選したが、当時の理事長と合はず、定年後はつまらぬ職にはつかず悠々自適であつたが、糖尿病にかかり入院したので見舞にゆくと、コーヒーに砂糖を山ほど入れて呑んでゐるので、呆れて注意も出来なかつた。奥さんがまたよく出来てゐて、それは彼が『四季』に書いてゐる。最後に会つた時も、コーヒー店に誘はれ、砂糖を山ほど入れてのむのを止めもしなかつた。もう生きる気も亡くなつたのであらう。(奥さんは一昨年十一月十一日逝去。)

近代文学を教えて三十年近くなる。ともあれいい男であつた。今度の原稿は遺稿となつたが、わたしは葬儀に出て悲痛に耐えられなかつた。何宗か知らぬが、院殿号を貰はなかつた。これも彼に似合つたことである。簡単であるが、最も気の合つた同志を失つて第五次『四季』(休まず書いた)をつづける元気もなくした。第十一号はその追悼号とする。なお、これで第五次『四季』は廃刊とする。同志の方々のおゆるしを乞ふ。

(田中克己)

季刊　四　季　第十一号　定価300円（送料170円）

発行　四季社
〒166　東京都杉並区阿佐谷南1－40－8　田中克己方
電話　03－314－2783
印刷　橋本保印刷
〒536　大阪市城東区天王田7－24　電話 06－961－4330